

第25章 平和について思う：1974年～1981年(37歳～44歳)

バーゼルのカーニバル

前章の息子アブベクトールの入院の顛末のところでは詳しく触れられなかった、私のヨーロッパの友人たちのことを、ここで少々述べたいと思う。1974年2月息子を入院させ、大叔父を見舞った後、私はスイスのバーゼル(Bâle)へ行った。友人のスイス人女性、ジェルメンヌ・ヴィンテルベルグ(Germaine Winterberg)さんに会い、バーゼル博物館のアウレフ展を見るためである。彼女は1967年4月のこと、学術調査のためにアウレフにやってきて、二週間ほど私の家に泊まった。彼女は、当時バーゼル博物館で学芸員をしており、当地の手工芸・歴史・風俗・俗信などを調査するため、私に協力を求めてきたのだ。この時の調査と収集はかなりの成果を上げたため、後にバーゼル博物館は特別に展示室を設けることを決定し、アウレフの多彩な生活様式や文化を示す品々と、それらの説明を展示するために、かなり大きな部屋を割り当てた。この展示は好評で、そのため博物館も、会期をずいぶん延長したそうだ。なお、ジェルマンヌは、私の叔母アイシャが機織りをする時の様子について『私が愛したアウレフの人々』という題で、素晴らしいルポルタージュを書いている。



機織りの様子(著者提供)

パリからスイスのバーゼルへ行くに当たり、私はストラスブールのシュミット医師のところへ寄ることにした。パリでは東駅から列車に乗ったのだが、私はそこで、迷路のようなレールの上を、沢山の機関車や客車が蠢いている光景

に目を見張った。これぞ先進工業国だと思った。こうした鉄道網は、フランスを含む先進工業国を引っ張っていく象徴なのだろう。私が乗り込んだ客車は豪華な作りで、かなり長い道中だったにも拘わらず快適に旅することが出来た。シュミット一家のところには一週間ほど滞在し、次に私はまた列車でバーゼルを目指した。私の乗った列車は、しばらくは普通に走っていたが、やがて駅も何もない中途半端な場所で止まってしまった。まだフランス領を出ない所だった。乗客は皆不審に思っ立ち上がり、車掌に詰め寄った。車掌は説明した。

「スイス人は時間にやかましいのです。この列車は予定より 5 分速く到着する見込みなのですが、時間にならないと駅に入れてもらえないのですよ。ですので、ここで時間をつぶします。」

バーゼルの駅に到着すると、フランスから来たせいだろうか、町も人もずいぶん静かに感じられた。駅舎は小さかったが、機能的で、よく掃除が行き届いていた。人間も物静かで、大声で話している者などなく、皆ジェスチャーで会話しているのではないかと思えるほどだった。駅員や、警官、税関吏も同様に、必要最低限のことしか口にしなかった。駅前には客待ちのタクシーの列があり、運転手たちの中に一人だけ黒人の男がいた。特に理由があった訳ではないが、私はなんとなく、沢山タクシーがいた中で、その黒人の運転手の車に近づいて行って、訊いた。その運転手は、何かドイツ語で応えたが、私がドイツ語が分からないことが分ると、ドイツ訛りの強いフランス語言い直した。

「ほら、一番前の車から乗る決まりなんですよ。」

言われた通りに私は一番前のタクシーに乗り込み、住所を書いた紙を運転手に見せた。10 分くらい走って、タクシーは 4 階建ての建物の前で止まった。運転手が呼び鈴を鳴らすと、門は自動で開いた。運転手は私の荷物を車から降ろし、料金を言った。私は紙幣を渡した。運転手はお釣りを返ししながら、「それでは良いご滞在を。さようなら。」と丁寧に言って去って行った。彼の礼儀正しさを目の当たりにして、私は、スイス人はみんなこんな風に親切なのに違いという気がしてきた。ヴィンテルベルグ家は、博物館さながらで、壁という壁は、インド・イラン・アフガニスタン・パキスタンなどの収集品で埋め尽くされていた。ジェルマンヌとは絶えず手紙のやりとりをしていたが、直接会うのは 8 年ぶりだった。家には、彼女の夫と、夫妻の二人の子供もいた。夫は、威厳ある雰囲気のある音楽家で、子供は上が 5 歳くらいのかわいい男の子、下の子は赤ん坊だった。

翌日私は、ジェルマンヌや子供達と一緒に、まず彼女の小さな店を見に行った。彼女はもう博物館の仕事は辞めていて、当時はバーゼル旧市街で東洋趣味の品々を売る店をやっていた。次に私たちは、バーゼル博物館に向かった。ジェルマンヌはもう博物館の学芸員ではなかったが、私が正式の来賓として博物

館を見学できるように取り計らってくれた。バーゼル博物館は、ヨーロッパ第二の規模を誇っており、展示の全て、とはいかなくとも大部分を見るのには何時間も要する。私は三日間続けて足を運んだ。初日以外は一人で行った。もちろんお目当ての、アウレフから運ばれた品々が展示された部屋へも行った。自分の故郷の歴史や民俗を示す品々が飾られているのを見て、私はとても誇らしい気持ちになった。展示品の中には、1967 年にジェルマンヌが博物館から派遣されてアウレフへ来た時に、タレブ・ムバラク・ハダラー師の手によって作られた経帷子（きょうかたびら）も交じっていた。

この他、私は、カテドラルなどの観光名所も見て回った。街の橋の上から眺めるラインの流れは圧巻だった。雨が年に一回か二回しか降らないサハラから来た人間にとっては、信じられないほどの量の水がたゆたっていた。私は色々想像した。この豊かな流れを船で行ったならどんなだろうか。この河の流量は、最大級のフォガラと比べたら何倍くらいになるのだろうか。フォガラは最大級のもので流量は、一分間に 700～1000 リットルくらいである。また、ヨーロッパ人たちは、こんな天国のような所に住みながら、何故、沙漠の国々を征服しようなどと考えたのだろうか、云々と。

ところで、この時のバーゼル訪問のお目当ての一つは、ここのカーニバルの仮装行列に参加することだった。ヨーロッパでも有名な祭典とのことで、時期を合わせて来るようジェルマンヌが強く勧めてくれたのである。カーニバルで一番盛り上がるのは前夜祭である。夜になると、蠟燭を灯したカンテラを手に数多くの参加者が集まる。大通りでは、若者たちが、松明を立てた山車をすごいスピードで引き回す。私は、傍らにいた一人の若い女性に、この祭りでは、どうして、こんなに沢山の木を燃やすのか訊いてみた。彼女はこう答えた。

「昔私たちの先祖は、“冬” は火を恐れているので、こうすれば“冬” は怖がって、人間に酷い悪さが出来なくなると信じていたんですよ。」

カーニバル本番の翌日は、朝の 4 時に起き出した。ヴィンテルベルグ夫妻の家には、私の他にも大勢友人たちが集まり、皆思い思いの仮装の衣装に着替えマスクを被った。バーゼルの旧市街の、最も古い建物が並ぶ地区にある広場に集合し、行列が動き出すのを待った。町の灯りが全て消されているので、広場は全くの暗闇の中に沈み、辺りを静寂が支配していた。そこに突然、耳をつんざくような太鼓の音が鳴り響いた。私はびっくりし、全身の毛が逆立つのを感じた。何故だが知らないが、私は恐ろしくなって、傍のジェルマンヌの手をぎゅっと掴んだ。後から、ジェルマンヌに、こう揶揄われた。

「あなたが、子供みたいに、あんまり強く手を握るものだから、血が止まるかと思ったわよ。」

仮装行進が動き出した。打ち鳴らされる太鼓に、フルートなど他の楽器も続い

た。空から雨が降ってきたが、気にする者は誰もなかった。行列はいくつもの小道を抜けて行った。私はこの仮装行列を心の底から楽しんだ。途中、カフェで休憩となったが、あちこちで笑い声ははじけ、和やかな空気が流れた。一人、また一人と立ち上がり、詩を朗読した。美しい韻が耳に心地よかった。私は、ここでは、人は皆、人種に関係なく、お互いが兄弟同士なのだと、心の底から感じた。私の祖父は屈辱の人生を送ったが、私は今ここにいて、人々の平等の輪の中にいる。このような文明社会で、教養ある人々の中に立ち交じっていることを、私は誇りに感じずにはいられなかった。休憩の後、私たちは再びマスクを被り、夜明けまで仮装行列を続けた。



カーニバルの仮装をしたヴィンテルベルグ一家とハジ氏 (著者提供)

アルプスの日々

バーゼルの後、私はもう一度、トンプリエ一家のいるフランス・アルプス地方のアルペールヴィルを目指した。そこの大河の滔々とした水の流れ、兩岸の見はるかす限りの緑の沃野、それに、河の水源となっている氷河などの景観を、是非ともカメラに収め、スライドにして、アウレフに帰ったら、自分の学校の生徒たちに見せたいと思ったのである。息子のアブベクールを病院に連れていく時に寄った時は、写真を撮って回るには十分な時間が取れなかった。生まれてから沙漠しか見たことのないアウレフの生徒たちはきっと、自分たちの住む世界と正に正反対の景観に目を丸くするに違いない。二つに世界で対照的なものを挙げてみるとしたら、こんな風だろうか。

どこまでも広がる緑の牧野 vs 一木一草とてない大砂丘
雪 vs 砂
大河 vs フォガラ
牛 vs 沙漠の痩せた羊
大規模な近代化された農地 vs 小さく区切られたのナツメヤシ農園
トラクター vs 小さな鋤 (すき)
コンバイン (刈入れ脱穀機) vs “メンジェル (mendjel)” (刈り取り用半月鎌)

アルベールヴィルへ着くと、私は翌一日は休息をとった。そして友人たちと滞在中のプログラムを相談し、氷河などの観光名所、溶鉱炉などの産業施設、森林といった所を回ることにした。天使の一家のダニエル・トンプリエさんは、サン・モガン (Saint Maugin) 高校で地理の教師をしていたので、授業を見学させてもらった。生徒たちは、遠い外国から来たお客と交流出来て嬉しいらしく、私に色々質問してきた。ここでは、トンプリエさんたちが新しい友人を紹介してくれたので、交友の輪がさらに広がった。ある中学の校長先生は、学校でアウレフのスライドの上映会をしたいので、私に出席してくれと言ってきた。中学校の教師や生徒の前で、数年前にアウレフで撮影された、ナツメヤシ農園やフォガラの映像が上映された。私は出席者からの質問に答えて、フォガラの水の計測や分配の方法などについて説明した。

ところで、私が、この時のアルベールヴィル滞在中で最も大きな労力を費やしたのは、スキーの練習だった。スキーは、私には結構な苦行だった。一回転ぶと、スキー板が重くて、自分の力だけでは起き上がれず、誰かに手を貸してもらわなければならないのである。私の肉体は、若い頃のように柔軟ではなくなっていた。しかし、ふと周りを見れば、6 歳か 7 歳の子供がゲレンデの端から端へとすいすいと滑って行くではないか。私は、自分の周りで繰り広げられる光景が信じられなかった。スキー場には、ロープウェイがあり、私も何回か、スキー板を担いだ他のスキーヤーたちに交じって、コースの上の方まで行った。スキーヤーたちは、終点に着くと、一瞬空を見上げてから、一気に斜面を滑り始める。特に熟練のスキーヤーのスピードは信じられないほどだ。私はといえば、どうしても滑り出す決心がつかず、結局、行きと同じように帰りもロープウェイに乗って戻った。麓に着くと、みんなとっくに滑り降りていて、私の姿を見ると笑うのだった。



ある教会付属学校で考える

1981 年にスイスのハンス・エルザム医師に会いに行った時のことである。私はエルザム夫人に、スイスの南端、イタリアとの国境近くの、ある町まで連れて行かれ、そこで夫人の弟に紹介された。彼は神父で、その町にあるカトリック系の学校の校長をしていた。夫人の弟は、どっしりと落ち着いた物静かな人だったが、身の内には燃えるような知性の光を感じさせた。また、周りの人々から一心に尊敬を集めている様子だった。神父と一緒に、何人かのシスターも同席していたが、私はまるで突然天使の前に引き出されたような気がして落ち着かなかった。神父はシスターの一人に、私に学校の中を案内するよう命じ、私は、教室・事務室・アトリエ・庭・実験室・運動場・厨房・食堂・寄宿舍などを見せてもらった。私は、校長の職にある者として、学校の管理とはこの学校のようにあるべきだと感動した。とくに施設の手入れの良さには目を見張るものがあった。この学校は創立 25 年になると聞いたが、どこも昨日出来たばかりのような新しさだった。特に印象的だったのは、消耗品は別として、全ての施設や備品が、初期の目録通りに、あるべき物があるべき所に収まっていることだった。机も全部、傷や染み一つなく、ぴかぴかだった。これを見た人はきっと、これこそ信仰の成果だと思うことだろう。実際、この学校は、他のどんな世俗の普通の学校より、よく組織され清潔だった。生徒たちも、普通の学校よりはるかに礼儀正しく、おそらく喧嘩や非行とは無縁と思われた。私は想像した。もし、国家が、この学校の人々のような人間によって導かれたなら、世界もどんなにか違ってくるだろう、と。高潔で利己主義とは程遠い心は、誠実さと正確さにつながり、自ずと行動も正しくなる。そういう人々ばかりならば、国家も警察や裁判所も必要なくなる。この学校の生徒たちは、卒業後きっと、人道のため、国家のため、神のために働くようになるに違いない。この学校でのような教育が生み出すのは、平和、繁栄、幸福である。平和なくして幸福は

ないが、平和は、利己主義を捨てた人間にしか生み出せない。

我が隣人たち

1948 年二つの国家が誕生した。一つは繁栄の一途を辿ったが、もう片方は未だ国家として日の目を見ずにいる。何故私たちは、このような欺瞞を許し、弱者に降りかかっている不公正に手をこまねいているのだろうか。レバノンのサブラー・シャティーラの虐殺や、ガザでの出来事は、忘れられてしまったのだろうか。世界は沈黙を守ったままだ。ベルギーは、結局圧力に負けて、シャロン・元イスラエル首相に対する告訴を取り上げなかった。シリアのバシヤール・アル・アサド大統領も、未だハーグ国際司法裁判所で裁かれるに至っていない。私たち人間は、未だに森の中の動物並みの秩序しか持ち合わせていないようだ。国連での、加盟国間の力関係が全く不均衡であることを誰もが知っているのに、ただ一つとして脱退する国はない。

訳注：サブラー・シャティーラ事件：1982 年 9 月 16～18 日、レバノン内戦の最中、親イスラエル派のキリスト教民兵が二つのパレスチナ難民キャンプを襲った事件。死者数は、イスラエル側かパレスチナ側か言うものによって 300 人から 7000 人とだいぶ幅がある。

イランとサウジアラビアを秤にかけた時、何が分かるだろうか。イランに関してだが、過去 30 年の間、政権交代が行われ、国家元首も 6 人交代しているにも拘わらず、人々はこの国を民主的だとは評価していない。何故なら、西欧の大国は、この国を嫌いだからである。一方で、愚鈍な王族に専横されているサウジアラビアは、西欧諸国の厚い支持を得ている。

イスラエルは世界中のユダヤ人に、民族主義を煽り立て、あたかも彼らが生まれながらのイスラエル国民であるかのような誤った考えを吹き込んでいる。つまり、生まれた国の国籍は二次的であり、まずはイスラエル国民であるべきだと信じ込ませているのだ。パレスチナ周辺の国々から百万人ものユダヤ人がイスラエルに流入した。唯一イランとイエメンのユダヤ人だけが、同朋への忠誠を誓いながらも、生まれた国に留まっている。シオニズムと同じ理論が、世界中の 15 億人ものムスリムにも通じるものか考えてみてほしい。全てのムスリムが、メッカを自分の国だ言いだしたら、世界はそれを許すだろうか。

世界が手をこまねいている間に、不公正に対する革命の芽が育っていく。それは、生よりも死を選ぶ抵抗方法、すなわち、カミカゼ（自爆テロ）である。「不公正」は「圧力」となり、「圧力」は「爆発」を引き起こす。今世界中で起こっているのは、この「爆発」に他ならない。こうした連鎖は、しごく普通のことである。将来の希望のない不均衡状態に置かれた時、人は生よりも死を選び、カミカゼに走るのだ。今世界中が、この現象に苦しんでいる。

かつて冷戦時代、アフガニスタンでタリバンはソ連に対抗する勢力として、西欧諸国やサウジアラビアの支持を受けており、イスラムは模範的宗教だった。冷戦が終わると、タリバンは、パレスチナを支援したという理由で、今度は西欧世界の敵になった。タリバンは、「不公正」を立ち向かえとパレスチナの人々を鼓舞しただけなのに。マドリード会議の後（訳注：1991 年 10 月の中東和平会議。後に 1993 年 9 月オスロ合意に発展。）、タリバンは、当事者双方に公平な交渉をせよと訴えたが、西欧諸国は、自分たちのお気に入りをかばって耳をかさなかった。もし米国がイスラエルのやりたい放題に目をつぶらなかつたら、もし米国が国連決議を邪魔しなかつたら、もし米国がイラクやアフガニスタンを占領しなかつたら、もし米国が、世界の色々な国の独裁者たちをかばわなかつたら、こんなに沢山の人が泣くことはなかつたらろう。

イスラムは本来、人類の間に不和の芽を撒くためにあるのではない。他の全ての宗教と同じように、地上に正義を実現するためにある。イスラムに先立つ諸宗教は、長い年月に間に歪められてしまったが、イスラムは、そうした歪みを正すために誕生した。すなわち、人類の長い歴史で生じた歪を修正するために誕生した。コーランは信徒に教えている。多くの預言者がいるが、その中の誰か一人をして、他より優れていると見なしてはいけないと。今世界中に不公正が蔓延している。ムスリムなど一人もいない国でも、その現象は同じである。アル・カイダが急速に支持を拡大した理由の一つには、かれらが不公正への戦いを呼びかけたからだ。しかし、善きことをしようとした者の心にも、影が差すことがある。彼らの一部は、他者を害することが不公正との戦いだと勘違いしてしまった。ビン・ラーデンの後を継いだ者たちが、公正の追及のために他人を殺す必要ないことを、いつか気付く日が来たら、その時初めて、世界は彼らとの交渉に応じるだろう。

聖コーランが教えるように、人は、全ての宗教の預言者に敬意を払わなければならない。しかし、西欧の人間は、言論の自由を口実に、他の宗教の預言者、特にイスラムのそれについて言いたい放題である。この事実は、火に油を注ぐに等しく、宗教間の対話を助けるどころか、宗教間の不和を助長するばかりである。しかし、ほんの一言の謝罪で和解は可能だ。過ちを認め謝ったからと言って、その者の名誉が傷つくことは決してなく、むしろその逆であるのに。